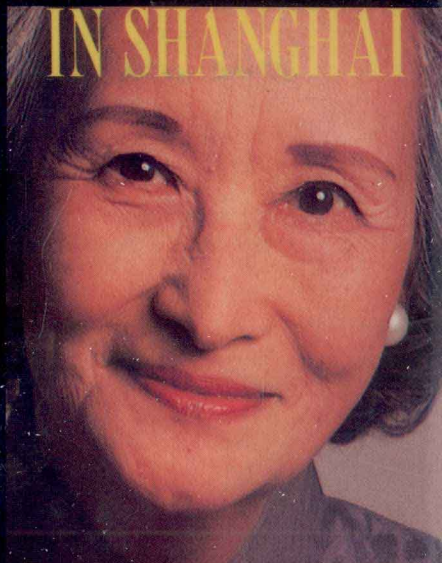


チエン・ニエン
鄭 念 著

篠原成子 吉本晋一郎 訳

LIFE AND DEATH
IN SHANGHAI



上海 の 長い夜

下

文革の嵐を耐え抜いた女性の物語

原書房

鄭 念 (チュン・ニエン)

1915年、北京生まれ。1935年～38年、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスに学んだ後、中国人外交官と結婚し、1941年～48年の間オーストラリアのキャンベラに在住。中国革命の後、シエル石油の上海支店長になった夫は、1957年に癌で亡くなるまで、その職にあった。その後、彼女は1957年～1966年の間、同支店の経営顧問をつとめた。鄭念は1980年に中国をはなれ、現在合衆国のワシントンD. C. に住んでいる。

篠原成子 (しのはら・しげこ)

1943年、東京都生まれ。1965年、東京大学教養学部(国際関係論)卒業。朝日イブニングニュース記者を経て、現在、翻訳に従事。主な訳書、N・ウェスト「スパイ伝説」(原書房)、M・ベシュロス「1960年5月1日」(朝日新聞社)、W・R・ナイカーク「ボルカー」(日本経済新聞社)他。

吉本晋一郎 (よしもと・しんいちろう)

昭和2年生まれ。鳥取県出身。朝日イブニングニュース編集局長を経て、朝日新聞東京本社編集局国際配信部にて英語ニュース記事の制作・国外配信に従事。主な訳書、バーク・ディヴィス著『山本五十六死す』、ロバート・カイザー著『ソ連の中のロシア』(全3冊)、スヴォーロフ著『ソ連軍の素顔』、同著『ザ・ソ連軍』(正・続)、ウラジーミル・ゴリアホフスキー著『ロシアン・ドクター』、同著『自由の代償』、チュオン・ニュ・タン著『ベトコン・メモワール』(以上原書房刊)他。

上海の長い夜 (下)

1988年8月10日 第1刷発行 定価1800円

1988年10月19日 第10刷発行

著 者 鄭 念

訳 者 篠 原 成 子

吉 本 晋 一 郎

発行者 成 瀬 恭

発行所 原 書 房

〒160 東京都新宿区新宿1-25-13

電話・代表 03(354)0685 振替・東京 5-151594

本文印刷=(株)ディグ/製本=(株)小高製本

著者写真=©Thomas Victor

装幀=坂田優/扉写真=©平早勉

ISBN4-562-01952-2

上海の長い夜
(下)

梅平に捧ぐ

上海の長い夜

下巻・目次

18	17	16	15	14	13	12	11	10
さらば上海	復権	毛沢東の死	ある異様な学生	真相を求めて	梅平はどこに	釈放	一種の拷問	弟の「告白」
309	275	227	179	139	105	77	33	1
エピローグ								
349								
著者あとがき								
359								
訳者あとがき								
360								

上巻・目次

1	魔女狩り
2	嵐の前の静けさ
3	紅衛兵
4	自宅軟禁
5	独房
6	取調べ
7	一月革命と軍事管制
8	党内の派閥
9	続く迫害

10 弟の「告白」



くり返し行われた闘争会も終り、夏になった。七月のむし暑さが本格的になる前に、上海では天気予報官が「黄梅」と呼ぶ長雨が一カ月も続く。六月になると黄色に実る梅、それにちなんで「黄梅」という言葉が生まれたという。

独房の至るところがじめじめし、セメントの床は黒ずんできた。特にひどいどしや降りのあとは、排水溝から逆流した泥水で壁の下がにじみ、四隅にどんよりした水たまりができる。

かび臭い匂いが一面に広がり、呼吸するたびに不愉快な思いをさせられる。せっかくしまっておいた私の冬のジャケットや綿入れのズボン、それに湿った床に一晚置いただけの靴にも、緑色のかびが生えている。

私は、氣候が暖かくなるのを、いつも心待ちにしたものであった。というのも寒さで震えあがることもないし、厚着しなくても済むからであった。なのに、湿気のため関節が痛みだし、赤く腫れてきたのを見て、私はうんざりしてしまった。雨と共に涼風が忍びよると、関節がえらくこわばってしまい、朝ベッドから抜け出するのに苦労したものであった。

それだけではない。歯ぐきの炎症もひどくなってきた。歯を磨くときだけでなく、絶えず出血する。そんな調子なので、食事の前には歯ぐきをこすり、指で血を押し出し、口をゆすがなくてはならない。そんなことをやってみても、塩けのある食べ物が炎症を起した歯ぐきに触れると、ひどい痛みで身震いが一瞬背筋を駆けめぐった。

食事に野菜が出ると、塩けを抜くのに水洗いしなくてはならない。歯ぐきの痛みがあまりにもひどいと、炎症を和らげるため、若い医師がサルファ剤をくれたものであった。だが、この医師の話では看守所の医務室に歯科はないのだという。

今までも大変なことだった、私が生き長らえてゆくことは、次第にじりじりと悪化してゆく体調を、なんとか保つための間断なき闘争といった様相を呈してきた。生きていくことがこんなにも厳しく、こんなにも意

味ないこととは、それまで思いもしないことであつた。

だが、肉体的な痛みとつらさはあつたものの、気分的にはそれまでの何カ月かと比べて、落ち着いていた。というのも、これから一連の尋問が始まるので、私の立場を終局的にはつきりさせることに望みを託すことができる、と思つていたからであつた。

やがて、私は二、三日おきに取調室に呼ばれるようになった。この部屋では、工宣隊の者が私の身内の者や友だちについて、次から次へと質問していく。尋問のあいまに、私はすべての身内の者と、どのような接触があつたのかについて、詳細に書くよう言い渡された。

そうした人たちが私になにを話したのか、一方で私がなにをそうした人たちに話したのかといった調子で、書いた内容が照合されることを私は知つていた。取調官は同僚の協力を得て、私の書いた内容を比較検討し、もし食い違いがあれば、私の誠実さに疑問を投げかける材料として使うことになろう。したがって、正確な記述をし、事実はこのらず述べながらも、詳細にわたらないように心がけ、そうした人たちの証言と食い違わないようにすることが大切であつた。

時として、尋問はけんけんごうごうとした雰囲気になることがあつた。取調官は脅迫的な言辞を吐き、私が書いたことやそれまでに陳述したことに、けちをつけた。そうでないときは、私の身内の者や友だちのなかのある特定の人について、その人を連座させるための証拠を出すよう、私をしつこく説得することもあつた。これは、その人が面倒なことに巻き添えを食らつてゐるということを示していた。

概して、私の身内の者や友だちについての尋問に答えるということは、そうした人たちの代弁をする機会が私に与えられたということであつた。その人たちの職業やそれまでの生活がどんなだつたかを知つていたので、文化革命でどんな問題を抱えていたのか、大よそのことを想像することができた。

これらの人たちがやったこと、話したことで、革命派の見方からして彼らの立場が良くなるようなことはな

んであったか、私は記憶をたどってみた。そして話さねばならぬことを、毛主席者が日頃使っており、その意にかないような言葉で、私は表現してみた。

私の世代で、教養ある中国人の顕著な特色の一つは、外国についての知識と経験、それに中国が相対的に後進国であることに對する憂慮から、熱烈な愛國精神を抱いていたことであつた。私たちが実感としてわかつていたのは、偉大な中国文明が、この百年にわたってじりじりと退化していったことであつた。

事実、共產主義革命が進歩への起動力を中国に与えてくれる、というのはうぶな考え方で、その結果、私たちの多くは一九四九年の中国の状態にいたままか、あるいはその後、その状態まで後退してしまつたのが現状であつた。そんなわけで私の供述では、自分の身内の者や友だちが中国を心から愛し、そして中国に奉仕していたことを、ありのままに話すことができた。

だが、それは供述したもの、なにより一つ聞き入れてもらえなかつた。あら捜しをするつもりでいるので、革命派は道徳的な美行には目を向けようとしな。さらに、毛派は、「共通の民族として祖先をとにする人びと」を意味する「國民」という言葉と、「一つの政体のもとに組織化された政治的地域社会」を意味する「國家」の概念を、取り違えていた。

共產党が政權を掌握する以前、だれかが中国の文化的生活に、なんらかの貴重な學問的あるいは芸術的貢獻をした場合、その人が寄与したのは中国ではなく、國民黨政權であつたと断定する風潮があつた。このような物の見方はあまりにも偏狭で、しかも不条理であつたので、私はこの点について取調官としばしば論争したものであつた。

しかし、やがてわかつてきたのは、私が問題にしていることが、私の事件を担当している小人数の毛派の人びとの偏見ではなく、実は共產党の定説そのものだということであつた。

一連の尋問が始まつたのは、雨季のことであつた。そんなことから、顔がぬれ、髪もぬれてもつれ、びしょ

びしよの靴下と靴で、取調室に出頭することがよくあった。レインコートはなかったが、幸いにもまだ涼しく、下着を重ねて着ていたので、身体までずぶぬれになることはなかった。

夏になっても尋問は続き、湿気と雨が、うんざりさせられるような酷暑と蚊にとつて代った。尋問では時として、他の人たち——それは明らかに私がそれまでに言及するように言われた人たちのことを扱っている組織から、派遣されてきたと思われる人物だった——が、私の取調官と同席することがあった。

それからわかることは、私の友だちや身内の者も私と同様、尋問されていることだった。私はその人たちのことが心配で、尋問に加わった者の言葉や態度を注意深く警戒していた。その様子がかなり穏やかで、質問の筋道が立っていると思われるときは安心したが、非常識で、しかも脅迫的なときは心配したものであった。

秋風が立ち、人民芸術劇場軍事管理委員会の数多くの委員が現われ、映画監督の黄佐臨のことについて尋問されて、私はひどい目にあつた。黄佐臨と、美しくしかも有能な女優であつた丹尼とは、私と亡き夫のロンドンでの学生時代からの友人であつた。共産党が上海をその支配下に入れたとき、黄佐臨はすでに著名で、作品が大当りする映画監督になつていた。

黄夫妻は、革命のとき上海の共産党地下組織から中国に残るように招聘されたものと思われていた。現に二人は新政権によつて直ちに受け入れられ、人民芸術劇場の設立に際して、黄佐臨は総支配人に任命され、共産党に入党した。二人は経歴を華やかに飾つてゆき、シェイクスピアの喜劇の翻訳や資本主義体制を風刺した現代米英作家の作品を含む、数多くの第一級の演劇を上海で上演していった。

他の国の劇作家がそれぞれの社会の実情を、批判的な見方で伝えていることを、中国の観客が知るようになったのは、黄夫妻のおかげであつた。一般大衆や文化担当の党指導者も、黄を第一級の演劇監督であると見なしていた。しかし、「政治に奉仕する芸術」そして「労働者、農民と兵士の栄光を称えるための芸術」といった、毛沢東路線をきちんと堅持してゆくだけの監督たちと黄が異なるのも、明らかであつた。

特に黄について尋問される前に、一九五〇年代に黄の監督で制作され、共産党による上海の掌握を称賛した映画「戦上海（上海のために戦う）」を批判した数多くの新聞論評を、私はすでに読んでいた。この映画は円熟した技術を駆使し、情宣活動の作品としてはたいへん成功を収めたもので、初めて上映されたときは、偉大な作品として喝采を浴びていた。

ところが今や、新聞は数日にわたって数多くのコラムでこの映画を批判し、黄が、共産主義の手から上海を護ろうとした国民党の連中を「英雄視」し、共産軍の兵士を軽視したと弾劾した。さらに批評家たちの告発によると、上海の崩壊と市民の苦難の描写によって、黄が武装闘争全般、特に共産党による人民解放戦争に反対する人物であることが露見したという。新聞でどっと批判が向けられたことから、黄が犠牲者に選ばれたのは明らかであった。

共産党政権に効果的に、しかも充分に奉仕してきた黄が、どうして激しい攻撃的にされたのであろうか。他の数多くの人たちと同じように、黄は共産党指導部における内部抗争の犠牲者であった。黄に地位を与えて共産党に入党させた人たちは、江青にとって一九三〇年代の上海での旧敵たちであった。その当時、江青は世間に認められなくて狂奔していた端役の映画女優だったが、黄の庇護者たちは、中国の左翼作家や芸術家が結集し、しかも劉少奇が地下で指導する中国共産党の一部を形成していた「左翼文化運動」の指導者たちであった。

明らかに、それら左翼知識人たちは江青を貞操がもろく、しかも素質もあまりない女だと見なし、ほとんど無視していた。江青が敵意をつのらせるようになったのは、その頃のことである。文化革命当時、党文化部の実権を掌握するに及んで、江青はそうした知識人を一人残らず逮捕させ、劉少奇派として告発した。

自分の部下を引き立てることは、中国における政治生活の常識となっていたので、どの官僚が失墜しても、常にその下で働いていた官僚たちの失墜という結果になったものであった。

「買弁^{ばいべん}だった黄佐臨を知っているか」と、私が毛沢東語録の一節を読み終えて、囚人の椅子に腰かけるやいなや、いきなり訊かれた。訊いたのは、取調官の横に座り、人民芸術劇場軍事管理委員会の代表と名のる男であつた。その質問から私にわかつたことは、黄の個人的行動には、けちのつけようがないため、その背後関係を徹底的に調べようとしていることであつた。

「買弁」というのは、外国商館と中国人との取引交渉や連絡に当る中国人のことであつた。この制度の生みの親は前世紀末の清王朝で、外国貿易に従事する者を統制するのが目的であつた。近代の商取引方法が導入されるに及んで、一九三〇年代には、この制度は次第に消滅していった。

だが、シェル石油といった大企業は買弁を解雇しなかつた。そうした企業は、買弁が死亡すると、その後任を新たに採用することをしなかつただけであつた。

中国共産党は、かつて買弁をやつた者をブルジョア階級のうちでも、もつとも反動的な分子と見なしていた。共産軍が上海を占領したあと、「買弁・ブルジョア階級」という烙印を押された者は、すべて投獄されるか、重い罰金を科せられた。黄の父は天津のシェル石油の買弁で、日華事変中に病死した。

「知っていますよ、黄佐臨さん。映画や演劇で著名な監督です」と私は答えた。

「シェルで買弁をやつたこともあるぞ」と人民芸術劇場から派遣された制服姿の男が言う。

「お前のことについては、すべてこちらでわかっている。お前は頑迷固陋な反動分子で、帝国主義のスパイだ。質問をそらそうとしているが、そんなことでは騙されはせん」

ここで、私をいつも尋問する男の番となつた。

「黄佐臨は、たいへん厄介なことになつた。奴は党に巧妙にもぐりこんだ階級敵だ。もしお前が黄をかばえば、その結果はたいへん重大なことになる。つまり、お前の立場は、これまで以上に悪くなるということだ。頭を働かせて、協力的な態度をとるなら、文化革命に貢献したことになり、お前のためになる」

「ありのままをお話しますわ」と私は答えた。

「ありのままを話すのなら、奴がシェル石油の買弁だったということだな」と、軍事委員会の男がだめ押しをする。

「シェル石油の買弁だったのは、黄さんの父上なんです。黄さんの家は、気の毒な家柄だったんです」と私は話した。

「買弁だった父が死んで、そのあとを継いだのが黄佐臨なんだろう」とその男は強く言った。

「買弁という職は、とつくの昔に廃止されたんですよ。黄さんの父上が亡くなられたときは、もうなかったんです」と私は話した。

「だったら、これはなんだ」とその男は言い、机に書類を投げ出した。取調官は、それを私に渡した。それは、天津のある土地の証書で、その地主として黄佐臨の印鑑が押されていた。私は証書に書かれた番号を見て、それがシェル石油の事務所で保存されていた書類であるとわかった。

「これは、古い書類ですよ」と私は言った。

「古かろうが新しくかろうが、黄佐臨がシェル石油の買弁であったこと、つまりこのことを党に知られないようにしていた、ということだ」

「聞いて下さるなら、全容をお話しします」と私は述べた。

「聞こう」と、取調官は言った。

「いつのことか覚えていないんですが、戦争が始まるずっと以前のことでした。国民党政権が、中国内の外国人による土地の所有を禁止する新規則を公布したんです。そこで外国企業はすべて、土地証書の名義を雇用している買弁に変更しました。シェル石油も、そうだったんです。黄さんの父上が他界されたとき、黄さんは黄家の財産を継承しました。」

これは戦争中のことで、天津は日本軍占領下にあつて、黄さんは天津にはいませんでした。シェル石油も、天津から撤退していたんです。真珠湾攻撃後、シェル石油は商活動を一切停止していました。私の想像ですが、黄さんの代理人が、だれかはわかりませんが、シェル石油の所有の問題の土地を含む、亡父の全財産に関する証書に黄さんの印鑑を押したと思うんです。ですから、このことは黄さんが買弁としてシェル石油に雇用されていたかつたという証拠になるんです」

「黄はシェル石油に役務を提供し、支払いを受けていた」と軍事管理委員会の男が言った。

「そんなこと、私はなにも聞いていません」

「お前の夫がシェル石油の総支配人として、支払っていたんだ」

「そんなことは、夫から聞いたことはありません」と私は答えた。私はこのとき、土地の処分についてはなにも知らないことにしておくのがもっとも賢明なことだと決めこんでいた。そうすれば、尋問する二人とも、黄佐臨を罪に陥れるのに私が役に立たないと思うようになり、私を追求しなくなるだろうと、考えたからであつた。

事實は、シェル石油の所有していた土地は一九五〇年の土地改革運動中に共産党政権によって押収されてしまったものの、黄佐臨にはその父の会社への功績に対する報酬として、シェルがある額の金を支払うことを望んでいたと、夫から聞いたことがあつた。このような好意的な処遇は、共産党の情宣活動で強調される、外国の搾取といったイメージとは合致しないものであつた。

「お前の言うことは、嘘だ。お前のところの使用人の話だと、お前とお前の夫は、あらゆることを話し合っていたというではないか」

「このことについては、夫は私に話さなかつたんです。おそらく、重要とは考えていなかったんでしょう」と私は述べた。

「夫の会社であったことすべてを話し合ったなんて、そんなことは絶対にありません」

「お前の言うことなんか、信じられん」

「それは、あなた方の問題です。いかなる支払いについても、私は知りません。だからといって、あなた方にわからないと言っているのではないんです。シエルの保存書類を調べられてもよいし、会計部に尋ねられたらどうなんです」

「そんなことは、すでにやった。こちらが、見逃すとも思っているのか。黄がお前の夫から支払いを受けた証拠は、すべて挙がっているんだ」

「だったら、なにも知らない私を追求することはないでしょう」

「黄佐臨がシエル石油の買弁であったこと、それを認めろとお前に言っているんだ。奴は役務を提供して、金をもらっていた。お前は、シエル石油の中国人従業員で最高の地位にあった。こちらが知っていることを、お前には確認できるはずだ。黄は、『買弁・ブルジョア階級』の一員だ。党から追放になる。黄を弾劾するため貴重な情報を、お前なら提供できるはずだ」と軍事管理委員会の男が言った。

共産党からの追放は、党員にとって考えられる最悪の運命の到来を意味していた。そうになると、人民大衆の一人とはふたたび数えられないことになる。社会におけるその地位も、反革命者とほとんど変らなくなってしまう、間断なく差別待遇を受けるということになる。

それに、黄佐臨の家庭では、子供や孫も痛めつけられるに違いない。共産党に命と才能を捧げた黄に、そのような将来が待ち受けていたことは、私には悲劇的で、不条理に思われたものであった。物事がそのようになってゆくことに、私は怒りを覚えた、そこで、「私が知る限り、黄佐臨は共産党の忠実な党員です。黄さんの父上が亡くなられたとき、シエル石油上海事務所には買弁は一人もいませんでした」と私は毅然とした態度で供述した。

「協力しないんだな」と取調官が言う。

「自分のために、点を稼ぎたくないのか」

「私は、真実に対して忠実でなくてはならないです」と私は応じた。

遂に、二人は腹を立てた。軍事管理委員会の男は顔を赤くして怒り、失望感とうんざりした気持を交えながら私をにらみつけた。

「買弁だった黄佐臨のことについて、書いてもらうことにする。知っていることは、一つ残らず書くんだぞ。黄のために隠し立てなんかしようものなら、その結果はお前にとつてもものすごく重大なことになる。貴重な情報を提供してくれるなら、文化大革命に貢献したことになる。そうすれば、点数が稼げるのだ」と取調官は言った。取調官の話は続く。

「黄が、お前やお前の夫に話したことすべてを思い出し、黄の生活や意見について知っていることを書くのだ。いいか、奴は階級敵だ。奴の正体を暴露し、告発するのだ。今こそ、お前の見解を明かすチャンスなんだ。奴のことを見事に暴露してくれたら、お前の矯正の過程に改善があったことを認めるとしよう」

それにつけ加えて、「点数稼ぎしたいのなら、黄佐臨を告発することだ」と軍事管理委員会の男が言った。

二人の発言は、私の人間性に対する侮辱以外のなにものでもなかった。だが、そうした言葉は、当時の政治運動に合わせるだけの目的で、虚言を誘導する典型的な例であった。いったい、どのくらいの数の人びとがそうした圧力に屈したのか、私には知る縁もない。私の場合そうした言辭は、真実だけを述べるという自分の決意をさらに強固にするのに、役立ただけだった。

黄佐臨の生活と、中国共産党が中国にとって前進と啓蒙とを象徴しているのだとする確固たる信念や、黄のその他の見解について、私知っているすべてのことを記載し終ったところ、一人はこの作文を私に投げ返し、黄がシエルの天津支店の買弁だったと書いていないという理由で、私を厳罰に処すと威した。だが、私は